



S T R A D I V A R I U

K A P P A N O V E L

推理傑作集

# 死線上のアリア

内田康夫



お願い

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。なお、最近、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえていただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―二―二三

(〒112-11)

光文社「カッパ・ノベルス」編集部

## 推理傑作集 死線上のアリア

1995年4月25日 初版1刷発行

|     |    |   |    |   |
|-----|----|---|----|---|
| 著者  | うち | だ | やす | お |
|     | 内  | 田 | 康  | 夫 |
| 発行者 | 森  | 元 | 順  | 司 |
| 印刷者 | 堀  | 内 | 俊  | 一 |

東京都千代田区三崎町2-18-11  
堀内印刷

|     |                                |                                        |
|-----|--------------------------------|----------------------------------------|
| 発行所 | 東京都文京区音羽2<br>振替 00160-3-115347 | 株式会社<br>光文社<br>電話 東京(3942) 2 2 4 1 (代) |
|-----|--------------------------------|----------------------------------------|

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613 © Yasuo Uchida 1995

ISBN4-334-07132-5

Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

JASRAC 出 9461147-401

し せん じょう  
死線上のエリア

うち だ やす お  
内田康夫



カッパ・ノベルス



死線上のエリア 目次

|                                            |     |
|--------------------------------------------|-----|
| 優しい殺人者                                     | 5   |
| 死あわせなカップル                                  | 39  |
| 交 <small>こう</small> 歓 <small>かん</small> 殺人 | 79  |
| 飼 <small>う</small> 女                       | 109 |
| 願望 <small>れんかん</small> の連環                 | 139 |
| 死線上のエリア                                    | 175 |
| 碓氷 <small>うすいとうげ</small> 峠殺人事件             | 211 |
| 自作解説                                       | 248 |

イラストレーション

山野辺進やまのべすすむ

# 優しい殺人者





「河豚腹です」と言ったように、小野は確かに思った。名は体を表わすというのは本当だなと、一瞬感心したくらいだ。ブヨブヨと水ぶとりに肥えた腹が、大量の皮下脂肪を胸から肩へ送り込み、本来首であるべき場所まで埋め尽くしてしまった。その延長上に顔とおぼしき肉塊が載っている。テラテラと脂光りする球状の突起が顎であり鼻であり頬である。ぼうぼうの髪が丸い額を覆い隠したその下に、鉛筆で線を引いたような溝が左右に二カ所、えぐれているのがどうやら目であるらしい。口はゴムマリ状の両頬のあいだにわずかに開閉して、濃厚な唾液をグチャグチャさせながら、濁った声を発した。小野が聞き取れずにとまどっていると、相手はモゾモゾと動

いて名刺を取り出した。

『警視庁捜査一課 警部 福原太一』

「あっ、福原警部、ですか……」

名刺を見て、小野は正直に驚いた。『キレ者警部』として名高い福原が、目の前の男だとは、信じがたい気がした。

「そうです。フグハラです。フグハラではありませんせんゾ」

福原警部は眠そうな目に精一杯の皮肉を籠めて小野を見た。小野の聞き違いを看破した眼力はたいしたものだが、ご面相がご面相だけに、どうにも迫力に欠けた。第一、本人は「福原」と訂正したつもりだろうけれど、小野の耳にはやはり「河豚腹」としか聞き取れないのだからお笑い草だ。

「では早速、事件の概要をご説明します」

小野は笑いだしたくならないうちに、と、急いで



喋りはじめた。

『美人ママ殺し』の一一〇番が入ったのは二十一時五分であつた。もっとも『美人ママ』というのはマスコミに載つた時点での表現なのであつて、一一〇番通報時には、単に『変死事件』として受け付けられたことはいうまでもない。

「訪ねた家の女主人が死んでいるんです」というのが、通報の第一声だつた。場所は青梅市郊外——というより『奥多摩』といったほうがピンとくる山峡の一軒家。

「あのオ、首の周りに絞められたような痕があるんで、ひよつとしたら殺されたんじゃないかと……」  
気弱そうな男の声が言う。男の名は神永洋二といつた。

警視庁からの指令で青梅署捜査係長の小野正警

部補がパトカーで現場に着いたとたん、神永は玄関先から飛び出してきて、「ああ、怖かった」と言つた。見るからに臆病そうな中年男だつた。

殺されたのは川井真理子・四十二歳。八王子と立川と所沢にスナックを経営するかたわら、もぐりの金融業のようなことをやっていたらしい。神永がこの夜、同家を訪れた目的も、滞っている借金の返済だつた。

「九時の約束で来たんですけどね、どの窓も電気が消えていて、真っ暗なんですよね。留守かなって思つたんですが、ちゃんと約束してあつたので、一応、チャイムを鳴らして、返事がないもんだから少し頭にきましてね、ドアのノブを引いてみたら、なんと、すんなり開くじゃありませんか。いつも戸締まりのいいママにしては、これはちょっとおかしいなつて思つて、もしかするとうたた寝でもしているのか、

それとも急病か何かで倒れているんじゃないか、などといういろいろ想像しまして、とにかく上がり込んで居間を覗いたんです。ええと、電気はそのときつけました。そしたらやっぱり川井さん、そこに倒れていました。てっきり病気かと思って近寄ってみて、死んでいるのが分かりました。それに首筋のところにもみず腫れみたいなのができているのが見えたもんですから、こりゃ、ひょっとすると殺されたんじゃないかって思って、それで急いで一一〇番したというわけです」

神永は小野警部補の質問に答える形で、要領よく経過を説明した。

川井真理子はリビングルームのソファに横たわるような姿勢で死んでいた。医師は死後二時間前後と断定した。その程度の経過時間ならたとえ誤差があったとしても、せいぜい、プラスマイナス十分と思

って差し支えない。神永が言ったとおり、被害者の首にはみごとな索条痕さくじょうこんが浮き出ている。網膜の鬱血状態うっけつもはっきりしていた。

「絞殺による窒息死。死亡推定時刻は午後七時前後」

小野が報告したとたん、警視庁の通信指令は矢つぎばやに指示をまくしたてた。

『現場付近の不審者を徹底的に検索、近隣に対する聞き込みを入念に行なう等、初動捜査に遺漏いろうなきを期すとともに、現場の保存、とくに被疑者が遺留せる指紋等の保存に留意せよ……』

例によって、センテンスの長い紋切り調がえんえんと続く。

（ばかばかしい、トーシロじゃあるまいし）

小野は苦笑しながら、声だけは真面目まじめくさって、「了解」と送った。

鑑識の作業が進められるなかで、神永洋二に対する事情聴取が行なわれた。訊問には小野があたった。

神永洋二は三十六歳、一流証券会社の営業マンで、川井真理子が経営するスナック・チェーン『マミィ』の所沢店の常連客だ。客として店に行っては、ママの真理子をはじめ店の者や、ほかの常連客に株や債券を売りつけようという下心があった。ところが、商売のほうはそれほどうまくいかずに、かえってミイラ取りがミイラになるような具合に、真理子から借金をする羽目になった。飲み食いのツケが溜まりだしたのがきっかけで、そのうちに、競馬の元手をちょっと用立てしてもらったのを皮切りに、借金は雪ダルマ式に膨らんだ。

「はじめのころは『いいわよ』って、気軽に貸してくれるんで、こっちもついつい調子よく借りてたんですけどね、ちょっと額がまとまったら、証文を書

かされて、それも月三分、サラ金なみの高利ですよ。あとで聞いたら、なんのことはない、半分本業みたいなものだったんですから、うまいことカモにされたようなもんです。お蔭で、毎月の遣り繰りが四苦八苦。ボーナスなんかふっとんじゃいますよ」

この日も暮れのボーナスが出たので、借金の一部を返しにやってきたのだそうだ。

聞いていて、小野は、こいつ、ばかじゃなかろうか——と思った。こっちが訊きもしないのに、被害者に対するウラミツラミをペラペラ喋っている。

「すると、神永さんは川井真理子さんを恨んでいたというわけですね」

「ええ、もちろんですよ。いや、私だけじゃありません。店の客のなかには何人も金を借りている人がいますね、寄るときわるとママのこき下ろしです。そのくせ、店に行ってママの顔を見ると、またぞろ

金を借りたくなるんですからね、あれは一種の魔力のようなものかもしれません」

「しかし、サラ金で借りるよりはましでしょう」

「そりゃまあ、そうですね。しかし、ちょっと返済が遅れると、すぐ会社に電話をかけて寄越すんですよ。こっちは信用が資本みたいな業種ですから、上司なんかに告げ口されるとクビが危ないので、戦々恐々ですよ」

「じゃあ、川井さんが死んで、ほっとしたでしょうな」

「え？ ええ、まあ正直言って助かったという気持ちも多少はありますねえ」

「まさか、神永さんが殺<sup>や</sup>ったんじゃないでしょうねえ」

「え？ やった、というと、ママを殺したという意味ですか？ 冗談じゃありませんよ、私がなんでマ

マを殺さなきゃならないんですか」

抗弁しながら、神永はしだいに顔色<sup>がんしよく</sup>を失っていた。小野は警察官特有の皮肉な目で神永を見つめてから、言った。

「ところで、スナック『マミー』ですか、その電話番号は分かりますか」

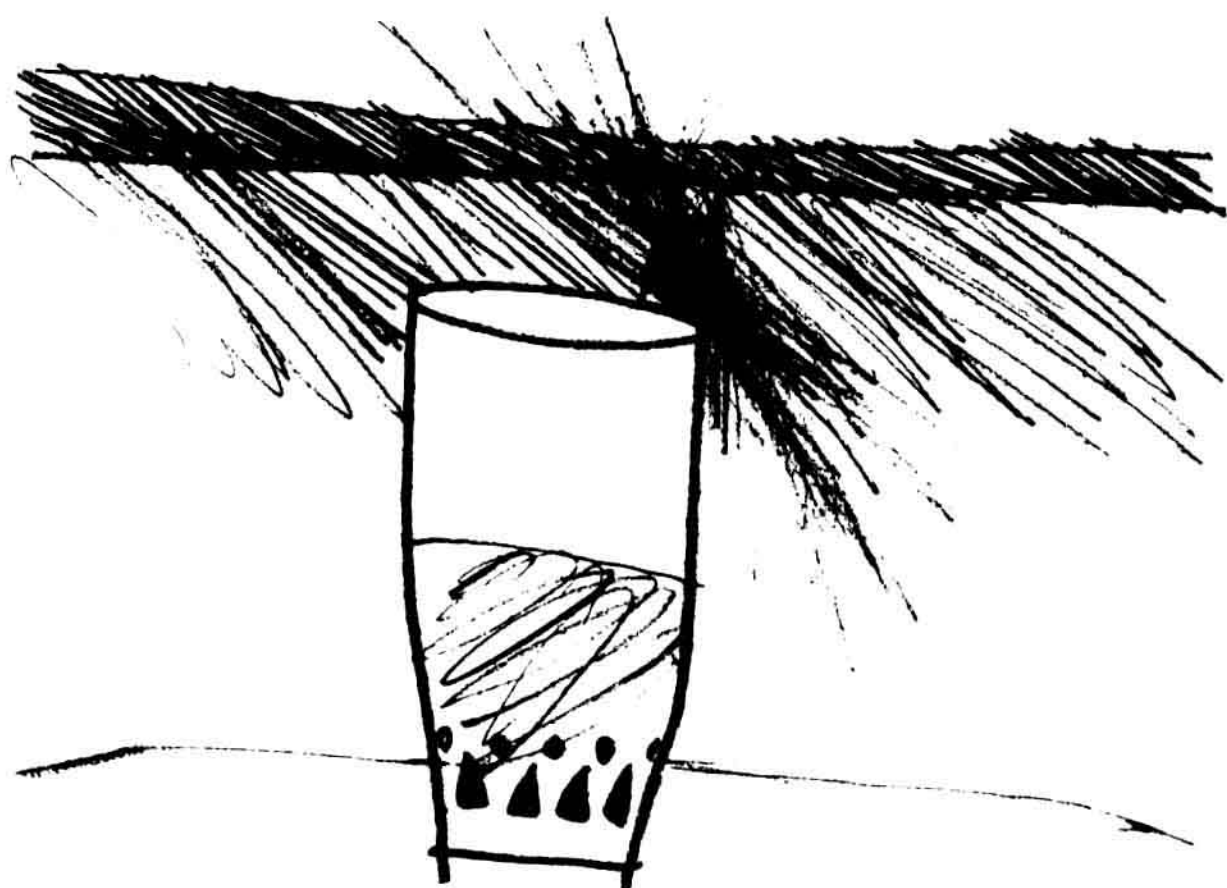
「ええ、所沢店のやつは知ってますけど、しかし、今日は日曜だから休みですよ。『マミー』は各店とも、役所の近くにあって、休日は商売にならないもんで休みになっているんです。それで私もここへやってきたのです」

神永の様子には、自分の立場を説明しようとする懸命さが、ありありと見えた。

鑑識の作業がひと区切りついたと知らせてきた。

小野は神永を待機させておいて、ふたたび現場に戻った。

My dear Anne,





川井真理子の家には客があったらしい。リビングルームのテーブルの上には、コップに半分たらず残った飲みさしのオレンジジュースが載っていた。テーブルの上のコップは一個だけだが、台所の流し台の水切りの上に、同じタイプのコップが置いてある。急いで洗ったとみえ、ジュースの糖分がこびりついていて。指紋は拭き取られていたが、それはかえって来客のあった痕跡を隠そうとしたことを証明している。

飲みさしのジュースから睡眠薬が検出された。かなり効き目の強い種類のものだ。真理子は睡眠薬を飲まされ、意識を失ったところを細引様ほそびきようのもので絞殺されたのだろう。その作業は比較的簡単で、力もあまりいらぬから、犯人を男と断定するわけにいかない。

川井家には真理子のほかに真理子の秘書兼お手伝

いを務める女性が住んでいることが、神永の話から分かった。

「タエちゃん、タエちゃんて呼んでいましたから、たぶんタエ子さんという名前だと思うのですが」

と神永は言った。

「いつもママのそばにいますかねえ……」

その「タエ」の行き先がまず気にかかる。住み込みのはずだという神永の話で、家の中を調べると、確かに若い女のものらしい個室がある。部屋の壁にかかった状差しの手紙の宛先が「木村多恵子様きむらたえこ」となっていた。母親からの手紙が何通もあり、実家が東京都下の三鷹市みたかということが分かった。小野は電話番号を調べて、すぐにダイヤルを回した。

木村多恵子はそのにいた。

小野が川井真理子の殺されたことを伝えると、「えーっ」と悲鳴のような声を上げたきり、絶句し



た。

「今日はお休みをもらって、ひと晩泊まって、明日の朝帰ることになっていたんです」

夕方五時ごろ、川井家を出て、六時半には三鷹の家に着いた、と多恵子は言っている。

「七時から友達と誕生パーティをやる約束になっていましたから」

それが本当なら、多恵子にはアリバイがあることになる。小野は部下に命じてウラを取らせる一方、木村多恵子には明朝青梅署のほうに出頭するよう指示した。「これから行きます」と多恵子は言うのだが、それだと夜半すぎになってしまう。

神永洋二にも、このあとの事情聴取は明日ということにして、帰宅させた。

「捜査の目鼻がはっきりつくまでは、なるべく遠方への旅行はしないでください」

「分かりました」

神永は自分に嫌疑がかけられているらしいと思いつ込んで、すっかりしょげていた。

捜査が進むにつれ、犯人が家の中を物色した形跡のまったくないことが分かってきた。遺体のそばには、革製の太振りのバッグが置かれ、中には現金で十二万円あまりと、預金通帳と印鑑も入っていたけれど、いずれにも手をつけていない。遺体も、衣服がきちんとしていて、ソファが小さいせいか、いくぶん窮屈そうに身を縮めた格好だが、ちょっと見には、まるでうたた寝でもしているかのように思える姿勢で静かに横たわっている。むろん、暴行の形跡はなかった。

「なんだか、ばかに優しい殺しだねえ……」

遅れて現われた署長が、そんなふうに述べたが、小野も同じ感想を抱いた。いったい何を狙った犯行

だったのだらう？

しかし、ともかく『流し』の犯行ではなく、怨恨が動機の殺人であることは間違いなさそうだ。

2

木村多恵子は二十六歳、まず妙齡みょうれいとわいていい年ごろだけれど、どうにも魅力のない女だった。痩せぎすで、顎の先が尖とがっているところは、魔法使いのおばあさんといった感じがする。度の強い眼鏡の向こうから、意地悪そうに吊り上がった目がこつちを窺うかがっている。

（頭はよさそうだな――）

多恵子と面と向かい合ったとき、小野警部補は思った。そうとでも思わなければ、相手に気の毒なよるな気がするほど、色気のない女だった。

「あなたと川井真理子さんの関係は？」

「関係って……、赤の他人ですわ」

いろいろある回答の中からそれを選んだというところが、木村多恵子の真理子に対する感情を示している、と小野は思った。

多恵子はもともとは、立川の店がオープンしたさい、従業員募集の新聞広告に応募したのが、真理子との出会いだという。

真理子はひと目多恵子を見て、「ああ、あんた、レジをやりなさい」と言ったそうだ。

「そのときは、信用されたのかなって思ったんですけど、あとで聞くと、レジは男にもてない女がいいということだったんですって」

笑いもしないで、多恵子は言った。

「レジを半年ばかりやったところ、秘書になれってママが言うんです。それまで住んでいた東久留米ひがしくるめの家

を売って、青梅に屋敷を建てたから、車を運転できる秘書兼お手伝いが欲しいっていうわけです。給料をアップしたうえ、三食つきだというので、私も悪くないなと思って、それに、家のほうでもなんだかんだうるさいもんですから……」

三鷹の実家には、両親と兄夫婦が同居していて、多少、いづらいという事情もあったようだ。

「でも、秘書っていうと聞こえはいいけど、実態は下働きみたいなもんでしたよ。ママは人使いの荒いほうでしたからね」

「しかし、三年間も勤めたのでしょうか？ 辞めようという気にはなれなかったのですか」

「ええ、ママにはどこか憎めないようなところがあって、ときにはこん畜生って思ったりするんですけど、ずるずる引き込まれちゃうんですよね」

その点は神永洋二が言っていたことと符合する。

「神永洋二さん、知っていますね？」

「ええ、お店のお客さんです」

「神永さんは、川井さんから金を借りていたそうじやありませんか」

「ええ、そうですけど」

「だいぶ取り立てが厳しかったそうですね」

「そうかしら、普通じゃないんですか？ だって、借りた金を返すのは当然なんですし、催促さいそくされたからって、文句を言う筋合いはないでしょう。それに、取り立てが厳しかったのは、むしろ神永さんよりほかの人たちにだったのじゃないかしら」

「ほう、それは誰と誰ですか。名前は分かりますか」

「ええ、分かりますよ。ママのノートにも書いてあったでしょう？」

「ノート？ そんなものは見当たらなかったが……」